



令和4年度(2022)第72回"社会を明るくする運動"作文コンテスト  
中学生の部【最優秀賞】【沖縄県最優秀賞】  
明るい社会の基本とは？

よしながはると  
下地中学校 1年 吉永陽飛

僕には家族がいます。そんなこと、当たり前と思う人もいるかもしれませんが、僕にとって家族とはかけがえのない存在です。僕には父がいません。僕が幼い頃に離婚したので、僕は父の顔を知りません。母は、女手一つで僕を育ててくれています。「明るい社会」とは何か考えた時、真っ先に思い浮かぶのが、家族です。家族という小さな社会が、人の生き方や考え方をつくるものだ、僕は思うからです。

僕は、小学校6年生の頃、「肝芽腫」という、珍しい大きな病気にかかりました。肝芽腫とは、子どもの肝臓にできる腫瘍、がんです。体調の悪い日が続き、大きな病院でこの診断を聞いたとき、もしかしたら死ぬかも知れないと不安でした。入院した後、母は毎日「頑張れ」と僕を励まし、明るく元気づけてくれました。あの頃は、自分のことで精一杯でしたが、今思い返すと、母も毎日不安な気持ちだったと思います。それでも、僕の前では、そんな顔を少しも見せずに、明るく笑顔でした。

また、僕を元気づけてくれたのは、母だけではありません。周りの友達、特にサッカーを始めるきっかけとなったA君です。A君は僕にとって弟のような存在で、いつも心の支えでした。また、同じサッカー部の仲間たちも、みんなで協力して千羽鶴を作って送ってくれたり、SNSのボイスメッセージで応援してくれたり、サッカーの練習の様子を動画で送ってくれたり、たくさん励ましてくれました。ある時は、メイクをして人気のBTSのまねをして笑わせてくれました。病室で、僕は久しぶりに心から笑った気がします。そして、その気持ちがうれしくて自然と涙があふれていました。「この仲間と一緒に、もう一度サッカーがしたい、必ず病気を治したい。」と、心の底から思いました。励ましてくれる人達や病院のお医者さんのおかげで、僕は手術を乗り越え、中学校の入学式も間に合うことができ、今、仲間達と一緒にサッカーを続けることができます。

僕は、母やA君、他の友達に苦しかった時間を何度も救われました。治ったあとに聞いたのですが、この病気は数万人に一人の割合のとても珍しいもので、状態によっては、命を落としていたかもしれない病気だそうです。きっと、家族がいなかったら乗り越えることはできなかったと思います。

僕には家族がいます。これは当たり前ではありません。病気になって初めて、血のつながりだけでなく、いっしょに過ごす仲間も家族のような存在だと実感しました。心を支え、安らげる場所、そして、僕を励まし、許してくれる場所、そんな僕の居場所を作ってくれる人達、みんなが家族だと思います。母に叱られ、言い合いになる時もあります。でも、いつもおいしいご飯を作ってくれたり、僕が失敗しても励ましてくれたり、アドバイスをくれたりします。いつも僕を見守り、味方でいてくれます。

また、僕は、たまにみんなと考えがずれているときがあります。そんな時、友達のみんが僕に合わせてくれたり、「それは、違うんじゃないか」と教えてくれたりします。みんな僕の意見を尊重し、良くないことがあれば注意する。そのおかげで、僕は意見を出したり聞いたりして考えを広げることができます。周りのみんなのおかげで、僕の心は少しずつですが、成長することができていると思います。お互いに助け合えるのが、家族だと思います。だから、失敗しても、また立ち上がれるのは、周りの人の支えがあるからです。

だから僕は、周りへの「感謝の気持ち」を忘れたくないと思います。僕は、まだ13歳で、助けられてばかりかもしれませんが、それを決して当たり前だとは思わず、いつか、これまで僕を支えてくれた人を支えることのできる人になりたいです。

明るい社会の基本は家族です。家族の形は人によってそれぞれです。血のつながりだけが家族ではありません。見守り、励まし、許してくれる場所。お互いが感謝の気持ちを持てる場所。そんな場所が、そんな存在の人が身近にいることが大切だと思います。

殺人や虐待などのニュースを目にするたびに、なぜこんなことが起きるのだろうと不思議でした。そこに、悩みを打ち明けられる人や苦しさを一緒に乗り越える存在がいたら何か変わったのではないかと、最近思うようになりました。

人は一人では生きていけない。だから、助け合いながら生きている。どんな人にも、そんな居場所があれば、明るい社会は、世の中に広がっていくのではないのでしょうか。僕にできることは少ないかも知れませんが、まずは身近な人達を笑顔にすることから行動していきたいです。